

《巻頭言》

東日本大震災と福島大学

副学長（研究）

高橋 隆行

あの未曾有の被害をもたらした東日本大震災からおよそ3年が経過した。かつて新聞紙上に毎日掲載されていた行方不明者数の欄も、いつしか無くなってしまった。もちろん、“もはや震災後ではない”などとはとても言えない状況であるのは言うまでもない。特に福島県は、地震、津波の被害に加えて、原発事故という三重の苦難を抱えており、高濃度放射能汚染水の漏えい事故など現在進行中の課題も未だ多く抱えている。

本学はこの大災害に対して、力不足の点が多々あったことも事実であるが、避難民の受入れに始まり、2011年4月には「うつくしまふくしま未来支援センター」の立ち上げや「福島大学東日本大震災総合支援プロジェクト 緊急の調査課題」の実施、汚染された小中学校校庭の除染手法実証など、これまで、地域にある大学として、大いに悩みながらも地域の課題に正面から取り組んできたと自負している。

また、2013年7月には、文部科学省国立大学改革強化推進事業の採択を受け「環境放射能研究所」を設立した。この研究所は、本学では初めてとなる附置研究所であり、複数の実績ある大学・機関による協同運営を行うことを特徴として、人類が経験したことのない温帯多雨地域の環境放射能の動態を世界の研究者と協力して総合的に解明することを目的とするものである。

地方にある国立大学にとって、地域に必要とされることは必要条件である。しかし、地域外の国民の血税をも投入して運営される大学である以上、それだけでは十分ではない。情報を最も豊富に保有する大学として、今回の災害から何を学びどれを後世に伝えるべきなのか。その「知」の純度を高めて体系化し、世界に発信してこそであろう。

今こそ本学の真価が問われている、と改めて肝に銘じたい。